

平成 25 年 度

慶應義塾大学入学試験問題

文 学 部

地 理 歴 史 (世 界 史)

- 注 意
1. 受験番号（2ヶ所）と氏名は、所定欄に必ず記入してください。
受験番号は、所定欄の枠内に一字一字記入してください。
 2. 解答は、必ず解答用紙の指定の箇所に記入してください。
 3. 解答用紙は、必ず机の上に残しておいてください。
 4. この問題冊子は、表紙を含めて10ページあります。試験開始の
合図とともに全てのページが揃っているかどうかを確認してく
ださい。ページが抜けていたり、重複していたりする場合には、
直ちに監督者に申し出てください。

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を漢字で記入しなさい。

春秋・戦国時代の後、長きにわたって中国に統一王朝が現れない分裂期が訪れるのは、魏晉南北朝時代である。後漢末、儒教を奉ずる知識人を宦官が弾圧する（ A ）の禁が起こり、政争と自然災害とが重なるなかで、困窮した農民たちは太平道の信仰のもと黄巾の乱で決起した。前漢・後漢あわせて約400年の長命を誇った漢王朝が崩れるとき、人々は次にどのような時代が訪れるのか予測できない不安のなかで暮らしたことであろう。後漢末の混乱から三国時代、南北朝時代を経て、隋によって西暦589年に天下統一がなされるまで、実に約400年にわたって分裂の時代が続くことになる。

魏晉南北朝時代は、儒教・仏教・道教の三教がせめぎ合う時代であった。国家の統制がゆるみ、それまで絶対的な指標であった儒教の拘束力が弱まると、人々はあらたな価値観を何に求めるか模索しなければならなくなった。知識人たちのなかには転変する政局から距離をおく者が現れ、老莊思想に基づく哲学的な論議である清談が流行した。清談の名手として知られる竹林の七賢の（ B ）は、儒教を無批判に信奉する俗人を白目で見たという「白眼視」の故事で知られる。

仏教は、漢代にはすでにインドから伝わっていたが、南北朝時代に大きな進展を見せた。北方では西域を經由して仏図澄や鳩摩羅什らが布教に努め、国家宗教であると同時に庶民にも浸透した。また、幾つもの王朝にまたがる長期間にわたり、数多くの石窟寺院が造営された。莫高窟で大量の文書が発見され、世界的に注目を浴びた（ C ）の石窟はその代表の一つである。一方、江南では仏教は貴族の教養として普及した。南朝の都である建康に仏寺が林立した様子を、唐の杜牧「江南春」の詩は「南朝四百八十寺 多少の楼台煙雨の中」と伝えている。そうした仏教の進展の刺激を受け、道教もまた南北朝時代に教団としての組織を確立してゆく。後漢末の（ D ）を始祖とする五斗米道（天師道）が源流となり、老莊思想や神仙思想とも融合しつつ、北魏の寇謙之の改革により国家の庇護を受けるにいたり、仏教と鋭く対立した。

強力な統一王朝を持たない分裂の時代は、多様な価値観を追求する余地が残されている時代でもある。北朝と南朝では、文化は全く異なる色彩をみせて展開した。北朝の北魏では、河川を基準にした独特の地理書である酈道元の『水経注』や、農業書である賈思勰の『（ E ）』など実用的な学問が結実した。一方、南方に移り住むことを余儀なくされた漢民族は、精神的な正統性を誇示するかのようになり、爛熟した貴族文化を生み出していった。陶潜のように平易で味わい深い詩を残した詩人もいるが、四字句と六字句による複雑な対句と韻を用いた（ F ）の盛行に見られるように、南朝の文化は華やかである反面、実用性からは遠ざかり、貴族たちの専有物とされた。

隋の文帝楊堅は長きにわたる分裂の時代を終息させ、科挙による人材登用の道を開いた。科挙は、唐代を経て、宋代の「殿試」によって制度としての完成を見るが、モンゴル族が支配者となった元代

には、儒教の素養をもつ士大夫が活躍する機会は減少し、漢民族の伝統的な学問や技芸は全般的に低調になった。しかし、それはただちに社会や文化の停滞を示すものではなく、元曲（雜劇）が数多くつくられるなど、都市における庶民文化の活力は宋代から着実に受け継がれていた。元曲の代表的作品である王実甫の『（ G ）』は、唐代の小説に基づき、金代の「語り物」の芸能も取り込んで改編された作品であり、漢民族と他民族支配との文化的な連結点の一つである。

明代の後期には、商工業と都市文化の一層の発展を背景として、木版印刷による書物の出版が急増した。出版される書籍は儒教の經典にとどまらず、科举の参考書、商業書、実用的な技術書など多岐にわたった。とりわけ明末には、キリスト教の宣教師によって紹介された科学技術への関心の高まりを見ることができる。徐光啓の『（ H ）』は西洋の技術も参考にして編纂されており、伝統的な儒学の範疇に拘束されない視点が、科学技術の進歩に貢献した側面をうかがい知ることができる。異文化や異教徒との接触による科学技術の進歩としては、すでに元の郭守敬がイスラーム天文学をとり入れて（ I ）をつくった例があるが、明末に至り、異文化摂取の気風はいよいよ盛んになった。儒教は常に漢民族の政治と学問の表看板として重要な役割を果たし続けたが、往々にして諸民族との折衝や異文化との接触のなかで、次の時代につながるあらたな展望が準備されたことも見逃してはならない。

明末の思想家である（ J ）の生家は、イスラーム教徒の商家であるといわれる。彼自身は仏教を信奉した陽明学者であり、マテオ＝リッチとも交友を結んだことが知られている。彼は宋代に集大成された朱子学が知識の習得に重きをおいて形骸化している点を批判し、四書五経は偽善に満ちていると論断した。そして欲望をも含めたありのままの心の発露こそが尊いのだとする「童心説」を唱え、従来は儒家が卑しんだ『（ G ）』や『水滸伝』のような庶民の戯曲・小説こそ優れているのだと高く評価した。しかし、その思想は当時においてはあまりに急進的であり、彼は異端として投獄され、獄中で自殺に追い込まれた。明王朝は漢民族の皇帝を戴く最後の王朝である。儒教・仏教・道教の三教、キリスト教、イスラーム教という様々な文化的融合を経てたどりついた明末は、書物の大量出版を含めた商品経済が発展し、庶民の力強いエネルギーが極限にまで発揮された時代である。そうした背景を持ちながらなお、異なる価値基準に目覚めた彼がたどった運命を考えると、それは漢民族支配における儒家思想のひとつの臨界点を示しているといえるであろう。

II 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ O ）に最も適切な語句やアラビア数字を記入しなさい。

ヨーロッパ屈指の長さを誇る（ A ）川に面するこの都市は、さまざまな民族が出会うルツボのような場である。異なる背景を持つ人々の共存から生み出される素晴らしさと難しさを証言している。

もともと、この場所はアルプス以北を中心に紀元前から広がり、鉄器を使用するラ＝テーヌ文化を発展させたインド＝ヨーロッパ語系の（ B ）人の定住地であったが、ローマ人の支配下に入り軍事・交易の重要な拠点となった。マルコマンニ人と戦うために自ら前線に赴いた皇帝マルクス＝アウレリウス＝アントニヌスが180年に没したのもこの地である。

ローマ帝国が動揺すると、この地域は放棄された。多くの民族が侵入し通り過ぎて行った。（ C ）率いるフン人、そしてランゴバルド人、アヴァール人などが支配し、955年（ D ）の戦いで敗れ、ようやくその勢いが止められたマジャール人も強い影響を及ぼしていた。この都市はこのようにつねに民族の狭間にあり、いくどとなく攻撃にさらされていた。特に有名なのは1529年スルタン・（ E ）率いるオスマン朝軍による攻囲であろう。攻囲は1か月で解除され、この都市は陥落を免れたが、ヨーロッパに強い恐怖を与えた。

中世になると、拡大する神聖ローマ帝国の支配下に入り、976年辺境伯領が設けられ、バーベンベルク家に授けられた。彼らの支配下でこの都市は繁栄した。この都市の象徴であるザンクト＝シュテファン大聖堂が建設され始めたのも、この頃といわれる。だが1246年バーベンベルク家の男系が断絶すると、継承をめぐる争いが生じた。一時は隣接するベーメン王オタカル2世の手に落ちたが、その勢力拡大はドイツ諸侯には脅威と映った。1273年ドイツ王に選出された（ F ）家のルドルフ1世はオタカルを戦死させ、これに乗じてこの都市を含む地域を家領とした。そののち、この家は600年以上にわたってこの都市を支配することになる。

この都市には十字軍に向かう将兵が立ち寄り、また（ A ）川の盛んな水運の恩恵を受けて、地域経済の中心となった。（ F ）家もこの都市の発展を助け、1365年には大学を設立している。これはドイツ語圏最古の大学であるが、1348年皇帝（ G ）が設立したプラハ大学に対抗したものといわれる。ナショナリズムの萌芽を見てとることもできよう。一方で多くのユダヤ人や（ A ）川沿いの多くの民族がこの都市に定住した。バーベンベルク家も（ F ）家も他民族との共生に寛容であったからである。さらに（ H ）年オスマン朝軍による第二次攻囲が失敗に終わると、（ F ）家はオスマン朝の衰退につけいり（ A ）川流域を侵攻し、多くの民族を支配下に収めていく。その版図は広大で、10以上の民族を抱えていくことになる。ナショナリズムに基づかない近代以前の帝国である。

しかしながら、この体制はナショナリズムの大波に洗われて危機を迎える。一時的に、外相、次いで宰相を務めた（ I ）が主導する保守反動体制によって小康を得たが、1848年の革命によって破綻した。さらに1859年フランスと組む（ J ）王国との戦争に敗れ、1866年にはプロイセンと戦っ

て敗れ、(F) 家を盟主とする (K) は解体された。このような衰退にあたって再編が行われた。総人口の4分の1しか占めないドイツ人単独の支配を諦め、一部の民族にある程度平等な関係を認める体制を目指したのである。

それとともに首都改造計画が進められた。市壁が撤去されて環状道路がつくられ、それに沿って歌劇場、市庁舎、大学、美術館、博物館などが続々と建設された。19世紀中頃に県知事 (L) の下で進められたパリ改造計画と通底する動きである。そのような文化政策の中で、コスモポリタンの文化を重視し、排他的なナショナリズムを抑えようとした。この動きは、たとえば、日本人の母から生まれ、汎ヨーロッパ主義を説いた (M) などの思想にも受け継がれている。

しかし、ナショナリズムの動きは止められなかった。皇帝フランツ=ヨーゼフの妻はイタリア人無政府主義者に暗殺された。また彼の甥で帝位継承者のフランツ=フェルディナントはサラエヴォで民族主義者に殺害されている。この都市で育ったユダヤ人作家 (N) はドレフス事件に衝撃を受けたことからシオニズム運動を始めたと言われるが、この都市の反ユダヤ主義の炎も激しくなり、反ユダヤ主義者ルエーガーは皇帝フランツ=ヨーゼフの抵抗にもかかわらず、この都市の市長に就任している。ルエーガーは、この都市の美術学校に通った若きヒトラーに少なからぬ影響を与え、ヒトラーは彼を「人生の師」のひとりと呼んでいるという。

第一次世界大戦によって (F) 帝国は解体されたが、さらに第三帝国に加わって、この国は第二次世界大戦においても敗北を味わった。ナショナリズムの激情を超えて、この国は永世中立国となって (O) 年独立を回復した。その多くがかつてこの国の一部であった東欧の国々が同じ年にワルシャワ条約機構を結成したことを考えると感慨深い。さらに国際原子力機関などの多くの国際機関を迎え入れている。だが1995年にヨーロッパ連合に加盟したことによって永世中立は形骸化し、また国内政治的にも排他的な極右政党が一定の勢力を得るなど、民族の狭間に位置するこの国の問題も尽きない。ナショナリズムの荒波に、現代はどのように対処すべきなのであろうか。

Ⅲ 以下の A, B, C の史料はいずれもアメリカ史に関するものです。それぞれを読んで ①～⑩ の設問に答えなさい。

A 「現在のイギリス王の歴史は、うち続く権利の侵害と篡奪の歴史であり、これらの権利の侵害や篡奪はみな、わが諸州（ステイツ）に対して絶対的専制をうち立てようとする直接的な目的をもつてなされた。このことを証明するために、公正な世界に事実を示そう。

彼は、公共の善にとって最も有益で最も必要な法に認可を与えることを拒んだ。

彼は、彼の認可を得るまでは法が施行されないようにし、即時の重要性を持ち急を要する法であっても、彼の総督がそれらの法を成立させることを禁じた。そして法の施行が停止されている間、彼はこれらの法に何の注意も払わなかった。

彼は、人民が立法府において代表される権利を放棄しない限り、人民の多くにとって便宜になった法も成立させることを拒否した。しかしこの権利は、人民にとってはこの上なく大事なものであり、専制君主にとってのみ手ごわいものである。」

- ① これはある文書の一部である。この文書は何と呼ばれているか。
- ② この文書が発表されたのは西暦何年か。
- ③ 文中の「現在のイギリス王」とは誰か。
- ④ この文書は制度的正当性を持たない政治組織によって発表された。この政治組織は何と呼ばれているか。

B 「天与の才能を享受し、他者よりすぐれた勤勉や節約や美德がもたらすものを享受することについては、人はみな法によって等しく守られる権利を持つ。しかし法が、このような自然で公正な優越に人為的な格差を付け加え、称号や賜物や特権を与え、富める者をより富まし、力ある者をより強くしようとするならば、社会の中でこうした恩恵を確保する時間も手段も持たないつましい人々——農民や職人や労働者——は、彼らの政府の不公正を訴え出る権利を持つ。……天が雨を降らせるように、政府が政府の恩恵を地位の高い者にも低い者にも、富者にも貧者にも、等しく降り注ぐのであれば、政府はまさに祝福された存在になるだろう。私の前にあるこの法は、こうした公正な原則から不必要に大きく逸脱しているようである。」

- ⑤ これはある大統領が、合衆国銀行に関する法に拒否権を発動した際のメッセージである。この大統領は誰か。

- ⑥ この大統領は、ある戦争で国民的英雄となり、後の大統領選挙への足場をかためた。この戦争は何と呼ばれているか。
- ⑦ ⑥の戦争は、ヨーロッパで戦われていた一連の戦争の余波として起こった。この一連の戦争はまとめて何と呼ばれているか。

C 『偉大な社会』は、すべての人々のための豊かさと自由の上に成り立つ。そのような社会を実現するためには、貧困と人種的不公正を終わらせねばならないのであって、われわれは今それに専心している。しかし、これは始まりに過ぎない。『偉大な社会』とは、すべての子供が精神を豊かにし才能をのばすための知識を見出すことのできる場である。それは、余暇が退屈や不安といった恐れのもとになるのではなく、人格を形成し思索を深める喜ばしい機会になる場である。……しかし何よりも『偉大な社会』とは、安全な港でも、休息の場所でも、最終の目的でも、やり遂げた仕事でもない。それは、われわれの生きる意味が、われわれの労働のすばらしい成果と調和するだろう約束の地に、われわれをいざなう不断の挑戦なのである。」

- ⑧ これはある大統領のスピーチの一部である。この大統領は誰か。
- ⑨ この大統領のもとでアメリカ合衆国はある戦争への介入を深め、財政危機に陥ることになった。この戦争は何と呼ばれているか。
- ⑩ ⑨の戦争に一応の区切りを付け、アメリカ合衆国軍の撤退を実現させた協定は、西暦何年に調印されたか。

IV イスラーム諸王朝に関する以下の(1)～(3)の文章を読み、空欄(A)～(O)に最も適切な語句を記入しなさい。

- (1) 1798年、フランス軍はオスマン朝治下のエジプトに侵攻した。有名なロゼッタ=ストーンが発見されたのはその翌年のことである。ヘレニズム時代の(A)朝の王を讃える内容をもつこの貴重な石碑は、古代エジプトの神聖文字を解読する上で重要な役割を果たした。このように、フランス軍による突然の占領は、近代的なエジプト学成立の契機となったが、結局、オスマン朝とイギリスの協力によって約3年でその終焉を迎えた。この衝撃的な事態に対処したオスマン朝のスルタンは、(B)であった。1789年に即位したこのスルタンは、西欧式の新軍を創設するなど近代化に尽力したことで知られている。

フランス軍の撤退後、エジプトでは政治の混乱が続いたが、これを巧みに收拾してエジプト総督となったのがムハンマド=アリーである。このオスマン朝軍人は、軍隊・産業・教育・医療などの諸分野でエジプトの西欧近代化を強力におし進め、アラビア半島やスーダンなどに出兵し、自らの勢力圏を急速に拡大させていった。さらに、オスマン朝にシリアの領有を求めて拒否されると、公然と反乱を起こし、勝利をおさめたのである。しかし、このような展開を望まないイギリス・(C)・オーストリア・プロイセンの干渉によって、ムハンマド=アリーの帝国形成の夢は打ち碎かれた。1840年のロンドン会議における上記4国の協定に従い、ムハンマド=アリーはエジプトとスーダンの総督職の保持や世襲を認められたが、その他の征服地については放棄を余儀なくされたのであった。

その後、ムハンマド=アリーの子孫たちが実質的に支配するエジプトでは、西欧近代化の方針が引き継がれたが、1860年代には莫大な外債を抱え込み、イギリスやフランスの財政的管理を受けるようになった。そうしたなか、立憲制を求め、「エジプト人のためのエジプト」をスローガンに掲げる(D)の反乱が起こった。こうして、エジプトは一時革命的な様相を呈したが、1882年、イギリスは単独の侵攻をもってこれを粉碎し、軍事占領下に置いた。この頃、エジプトに従属していたスーダンでも外国支配に抗する運動が活発化していた。北部スーダンの庶民の家に生まれたムハンマド=アフマドは、自らが(E)であると宣言し、新たな抵抗を組織した。(E)とは、アラビア語で「救世主」、あるいは「導かれた者」を意味する。この宗教運動によって1885年に創設されたスーダン国家が、列強によるアフリカ分割の時代に十数年間にわたって独立を守ったことは、注目に値するといえよう。

- (2) モロッコに生まれたイブン=バットウータは、14世紀前半のイスラーム世界における偉大なる遍歴者であった。彼の長大な旅行記の中で特に精彩を放っているのが、8年に及ぶインド滞在の部分である。イブン=バットウータはインドにおいて単なる旅人ではなく、デリー=スルタン朝

の第3番目の王朝である（ F ）朝のスルタンに（ G ）として仕えていた。なお、イスラーム法廷の裁判官を意味する（ G ）は、後代のオスマン朝では地方行政官の役割も担った。（ F ）朝の領土はインドの南部にまで広がり、デリー=スルタン朝を通じて最大の版図を実現したが、14世紀末になると中央アジアに興ったティムール朝の侵攻を受け、衰退に向かった。その後、15世紀半ばからは、デリー=スルタン朝最後の王朝であるアフガン系のロディー朝の時代になった。このロディー朝を滅亡へと導いたのが、ティムール朝の王子のバーブルである。文武の才に恵まれたバーブルは、アフガニスタンからインドへと進出し、1526年にロディー朝を倒し、「インドのティムール朝」ともいわれるムガル朝を創設した。そして、このインドの大帝国にふさわしい支配体制が確立されたのが、第3代皇帝のアクバルの時代であり、そこから第6代皇帝の（ H ）の時代までが王朝の最盛期とされる。1658年に即位した（ H ）は、スンナ派イスラームを重視する支配体制を固め、領土の拡大にも積極性を示して、デカン地方のゴールコンダ、ビージャールの両ムスリム王国を滅ぼした。17世紀はインド経済の隆盛期でもあった。ヨーロッパの東インド会社とインド各地の交易が活発化し、綿布や藍といった商品の取引量は莫大なものとなり、インド洋の交易諸都市の発展もみられた。

ムガル朝との間に深い交流関係を築いたのが、イランのサファヴィー朝である。スンナ派のオスマン朝と対抗関係にあったサファヴィー朝は、シーア派の学者を呼び集め、同派を国教に定めた。また、サファヴィー朝の君主は、古代以来イランの王を意味する（ I ）の称号を帯び、イラン的な王権の装いもまとった。16世紀末に第5代の王となったアッバース1世は、改革政治を断行して王朝の最盛期を現出させた。彼はグルジア人などのカフカース出身者を奴隷として導入すると軍人や官僚として活用し、中央集権的な支配体制を固めた。王朝創設時の首都は、かつてイル=ハン国の首都でもあった、アゼルバイジャン地方の中心都市の（ J ）であったが、アッバース1世の治世には、イスファハーンが新首都として繁栄を謳歌した。この古都は、「王の広場」を中心に、サファヴィー朝の栄華を今に伝える美しい歴史建造物に満ちあふれている。

- （3） 10世紀は、イスラーム世界の歴史において「シーア派の世紀」とも呼ばれる。イスラーム世界の東西の主要地域に強力なシーア派政権が出現したからである。東方では、世界最大の塩湖である（ K ）海の南岸地域のダイラム地方に興ったブワイフ朝がイラクへと支配領域を広げ、アッバース朝の首都バグダードを占領した。ブワイフ朝の君主は、アッバース朝を存続させつつ、大（ L ）として政治の実権を掌握した。ブワイフ朝はシーア派の中の12イマーム派の王朝だったが、西方に興ったファーティマ朝はシーア派の一派のイスマール派を奉じていた。ファーティマ朝は、同派に特徴的な宣教活動と北アフリカ先住民の（ M ）人のクターマ族の軍勢力とが結び付くことで、現在のチュニジアの地に誕生した。なお、ローマ世界の「非文明人」に由来する呼称である（ M ）の人々は、「高貴なる自由人たち」を意味する「イマジゲン」

と自称する。

ファーティマ朝の君主は、スンナ派のアッバース朝カリフへの対決姿勢をあらわにし、シーア派の最高指導者を意味するイマームの称号に加えて、カリフとも称するようになった。969年には念願のエジプト征服を実現し、城郭都市のカイロを建設すると、王朝の新首都と定めた。10世紀から11世紀にかけて、インド洋と地中海を結ぶ国際交易の幹道が従来のペルシア湾経由から紅海経由へと変化したため、ファーティマ朝は、豊かなエジプトの農業に加えて、国際商業によっても繁栄を極めた。しかし、12世紀後半になって十字軍勢力のエジプト侵入が繰り返されるようになると、王朝の滅亡へと向かう。ファーティマ朝にとって代わったのは十字軍国家ではなく、スンナ派のセルジューク朝の流れをくむ（ N ）朝の武将のサラディンが創始したアイユーブ朝であった。そして、このアイユーブ朝とそれに続くマムルーク朝の時代には、インド洋と地中海の両世界を結ぶ香辛料交易において、（ O ）商人と呼ばれる大商人たちが活躍した。彼らはアレクサンドリアをはじめとした地中海の港において、ヴェネツィアやジェノヴァなどの南欧の商人たちとさかんに取引し、巨富を築き、社会の名士として慈善事業にも力を注いだ。